

美術の窓(79)

続・構図の交錯

大和文華館館長 水田 徹



図1 アテナ・パルテノス
大理石、高さ105センチ、
アテネ国立考古博物館蔵

本誌先々号でパルテノン・フリーズ浮彫の騎馬行進図を取り上げ、二列の行列の交錯が新旧二つの歴史の交錯を表している様子を紹介しました。引き続き今回は、同じパルテノン神殿のフリーズ浮彫と神殿本尊の間にも構図の交錯が認められるのではないかと、いささか大胆な試論を展開します。

古代ギリシアの神殿は日本の寺院と全く同じように信仰の場であり、本堂の中央に本尊を据え、人々は日夜これを礼拝しておりました。パルテノン神殿の本尊はアテナ・パルテノス(処女神アテナの意)と呼ばれたアテナ女神像で、高さ10メートルの木組みの上に、顔や手足など肌の部分に象牙の板を張り巡らし、目には玉石を象眼し、着衣には金箔が施してありました。

残念ながらオリジナルは失われましたが、ローマ帝政時代にオリジナルを極めて忠実に縮小コピーしたと考えられる大理石像がアテネの国立考古博物館に現存しています(図1)。それによると本尊は兜と胸甲に身を固め、右手に有翼の女神ニケを差し出し、左脇には

楯と槍が立てかけてあります。ローマ時代の旅行家・地誌作家パウサニアスによると、原作ではこの楯の外側にアマゾン退治物語が浮き彫りされ、内側には神々と巨人族の戦闘図が彩画されていたといえます。薄暗い本堂の奥に象牙像が微かに浮かび上がる姿は、いかばかりか神神しく威厳に満ちていたことでしょう。作者は神殿本体の施工を総監督した彫刻家フェイディアスで、このアテナ・パルテノスの他にも幾体もの本尊を制作し、神像を作っては右に出るものなしと伝承される巨匠です。

そのフェイディアスがとりわけ深慮遠謀を巡らせたと考えられるのが本尊の右手に載るニケの図像です。ニケは戦いや競技の勝利者に大神ゼウスの祝意を伝える役目を果たす女神で、美術の上では、勝利のシンボルであるリボンや頭冠、あるいは神酒を入れた瓶を手で天空を駆ける姿に表されます。

アテナ・パルテノスの場合はどうでしょうか。ニケ像の頭部と手の持ち物は損逸していますが、本尊の手の返しとニケの衣のなびき、翼の開き加減から見て、ニケはいま正に飛び立とうとしています。問題はその飛び立つ先がどこであり、誰に祝意を授けようとしているのかという点です。一般には本尊となったアテナ女神に最高神ゼウスが祝意を伝えるべくニケを遣わしリボンを授ける場面、あるいは自らのための神殿を建造したアテネ市民に対し祝意を伝えるべく女神自らが腹心のニケを遣わす場面、のいずれかと解釈されます。しか

しながら前者の解釈はニケがすでにアテナ自身の手に乗っているという点にやや難点があり、後者の想定では祝意を受けるべき相手の姿が特定できず、起承転結を図像上に明示するギリシア美術の原則にいささか則しません。一体真実はどこに隠されているのでしょうか。

図2はパルテノン・フリーズのうち先々回に紹介した騎馬行進図に先行する場面で、左端から順に祭礼のメインイベントである神衣奉獻の場面と座態の神々の図、そして指揮官に先導されて行列の先頭を歩むアテネ市民の姿が刻まれています。そして図が小さくて恐縮ですが、その市民のうち右端から数えて6番目までは、神酒を入れた瓶を持つ少女とそれを祭壇に注ぐための酒杯を手にした少女が交互に並んでいます。9番目の少女だけは酒杯を手を孤立し、酒杯と対をなすべき瓶を持つ相手の姿がフリーズ上にはどこにも見当たりません。恐らく作者は、本尊が右手に差し出したニケに瓶を持たせ、その瓶と、フリーズ上の9番目の少女が手にした酒杯とを対にすることによって、本尊自らが腹心のニケを介して市民の祭礼に参加するという意味を持たせたものと考えられます。

パルテノン神殿の造営は都市国家アテネの政治力と財力の頂点を象徴するものですが、同時にそれは精神的にも、人々が神々を自分たちと同じ地平に見ることが出来た、人類史上まれにみる幸せな時代であったということ、私たちに教えてくれるものといえましょう。

図2 パルテノン東フリーズ(部分)
大理石、大英博物館蔵

